明日からできるアクティブラーニング、入門編

愛媛大学医学部附属総合医学教育センター　小林直人（naoto@m.ehime-u.ac.jp）

【1】アクティブラーニングを定義する

「アクティブラーニング」という用語は、様々に定義されている。いくつかの文献や資料から、その意味するところを引用してみよう。なお引用部分中の下線は全て筆者による。はじめに要点をまとめておくと（詳細を読み飛ばして3ページ目に行っていただいても大丈夫なように）、

・学生が積極的/能動的に参加する授業形態である

・学生自身が話したり議論したり、また書いたりする活動が必要である

・大人数講義の一部分として実施されることも、実習などの形態をとることもある

・従来から行われてきた教育改善のための普段/不断の努力の延長線上にある

・学生が何を学ぶか、学生が何を身につけるか、という視点がベースになっている

と言えるようだ。

まず 10 年ほど前の文部科学省の資料では下記のように説明されている：

> 伝統的な教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称（文部科学省、2007）

下って 2012 年の中央教育審議会の答申では：

> ［前略］教員と学生が意思疎通を図りつつ，一緒になって切磋琢磨し，相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り，学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的，倫理的，社会的能力を引き出し，それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義，演習，実験，実習や実技等を中心とした授業への転換によって，学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ，生涯学び続ける力を修得できるのである。（中央教育審議会『質的転換答申』2012、p.9）

とされている。引用部分の最後に述べられている「生涯学習」のためのスキルの必要性は、全国医学部長病院長会議（2017）による「医学教育モデル・コア・コンピテンシー」でも強調されている内容である。

一方、溝上は共著書（松下、2015）の中でアクティブラーニングを以下のように定義している：

> ［アクティブラーニングとは］一方的な知識伝授型講義を聞くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

ほぼ同様の定義として、高田は内科学会誌の総説（高田、2015）でこう指摘している：

アクティブラーニングでは、学習者が新たに受領した情報（理論・概念・事実）について、またはそれらを用いて、何らかの「活動」に「従事」する。

高田はさらにその総説の結語の中で：

アクティブラーニングは学習の質を大きく変え、高次レベルの知識の習得を可能にするアプローチだが、その導入は、必ずしも抜本的な教育プログラムの改革を要するものではない。大人数講義を数分間中断して、個人やペアで学習を振り返らせたり、質問を与えて取り組ませたりする、というごく小規模の学習活動の導入から始められる。

と述べている。また亀倉は著書（亀倉、2016）の「あとがき」において：

［前略］教員はいずれにしても学生が生き生きと（＝アクティブ）学ぶ（＝ラーニング）ように責任を持つ（＝FD）存在であること、すなわちアクティブラーニングとは、これまで教員が学生のためを考えて教育上の諸工夫をしてきたことから特段に何かが変わるものでもないし、また難しく考える必要もないということである。

と主張している。

最後に、「医学教育」誌の座談会（大島・福島・山岡、2017）を紹介しておく。「医学教育」誌では、この座段会が掲載された次の号で読者の立場からの寄稿（小嶋、2017）が掲載されており、そこでの指摘が非常に参考になる。

「アクティブ・ラーニングとは学習の姿勢であって、方法論ではない。脳を活性化させる、脳にエクササイズをさせることが必要なのだ」というお話は腑に落ちた。アクティブ・ラーニングといえばグループワーク、PBLと考えていたが、状況に応じた多彩な方法が考えられ、工夫の余地は無限大だ。（小嶋、2017）

この座談会（大島・福島・山岡、2017）では非常に気になる指摘がなされている。ある節に次のようなタイトルがつけられているのである：

実習そのものがアクティブ・ラーニングの場になって欲しい

臨床実習（臨地実習）は授業形態としては非常に「アクティブ」に見えるが、現実は必ずしもそうとはいえない、という対談者らの危惧が現れている。「身体的にはアクティブだが、頭の中はアクティブではない」と言われる所以である。対談の詳細は原典をお読みいただくとして、ここでは、アクティブラーニングは授業の形態にはよらない、ということを再確認しておきたい。

「アクティブラーニング型」の授業の形態は様々であり、それほど難しく考えなくても、気軽に始められるものと考えていただきたい。今回、医学教育学会卒前教育委員会が作成した資料は、“明日からできるアクティブラーニング”がモットーである！

【2】アクティブラーニング型授業において学生の成績を評価する

あらゆる場合において、成績評価はその授業の目的と直結している。

例えば、知識定着を目的とした授業（多くは大人数講義）の中でアクティブラーニングの手法を用いた場合には、成績評価は従来の筆記試験で十分であろう。一方、コミュニケーション能力やリーダーシップを育成しようとした授業（多くはグループでの学習）の評価では当然、目的に応じて別の方法をとる必要がある。評価ツールの参考例として、巻末にあげた文献（佐藤、2010）からいくつか引用しておく。評価シートはルーブリックの形態をとることも多い。下記のようなシートは、積み重なれば学修ポートフォリオにもなるであろう。また、グループワークの場合、学生同士の評価を組み入れることもできる。いずれにしても、学生自身が学んだことを振り返る（省察する）プロセスを促すことが必要である。

グループワーク自己評価シート　　筆者注：以下、自由記載

1　本日のグループワークから、あなたが学んだレッスン（教訓）は何でしょうか？

2　本日のグループワークを通して、自分自身について気がついたこと、発見したことは何でしょうか？

3　本日のグループワークを通して、グループメンバーについて気がついたこと、発見したことは何でしょうか？

グループワーク・ピア評価シート　　筆者注：以下、被評価者ごとに記載

1　〇〇さんの作業の質に満足している。　　筆者注：回答は数段階で、以下同じ

2　〇〇さんの作業の量に満足している。

3　〇〇さんは全ての話し合いに積極的に参加している。

4　〇〇さんは作業を共有し、グループに貢献している。

5　〇〇さんは、全てのグループメンバーに敬意を示し、うまくグループ学習が進行するように心がけている。

6　コメント（良いところ、もっと良くなるところを書いてあげましょう）

【3】アクティブラーニングを導入するためにFD研修を行う

“気軽に”と言われても、いざ始めてみようとなると躊躇してしまうのも致し方ない。そこで、各大学でアクティブラーニング導入のための集合型FD研修を行うためのヒントについて、実際に講習を担当した経験をもとに述べておく。

（1）研修の前に学内向けに情報提供をしておくこと。参考文献等の情報をメールで流しつつ、図書館に数冊ずつ揃えてもらって目立つスペースに置いてもらう、等の工夫ができる。

(2)一般に、自ら受けたことのない形態の授業はできない、と言われる。そこで研修では、参加者(教職員)に実際にアクティブラーニング型の授業を経験してもらう“模擬授業”を提供する。模擬授業の担当者は学内の教員でよいのだが、講師としての経験が豊富な学外者を招聘するのが一般的かもしれない。

(3)現在、医学教育学会卒前教育委員会では、アクティブラーニング入門のための動画教材(DVDないしウェブサイト経由で提供予定)を開発中である。動画教材(あるいは文書やスライド等の教材)を事前に視聴しておいた上で集合型研修を行えば、研修自体が「反転授業」の形態になり、参加者にアクティブラーニング型の授業を経験してもらうことになる。その場合、集合型研修の場では、自大学でアクティブラーニングを導入するための具体的な方略・方策について参加者同士が議論することになるが、特に試聴してきた教材に対してみんなで“ダメ出し”をするようにしむけると、アイスブレーキングの効果もあって議論が進むことが多い。ただし、そのような趣旨で用いることを当委員会には事前にお知らせ下さいますよう、お願いいたします。

【4】アクティブラーニング型授業を自分でやってみる

当委員会の作成した教材がお役に立てば光栄である。是非ご自身でもいろいろ試していただき、その結果をフィードバックしていただきたい。

【文献】

高田和生「アクティブラーニング:主体的で効果的な学習を可能にする授業とは」、日本内科学会雑誌、104(12):2498-2507, 2015

蒋妍「大人数講義で行うアクティブラーニング　ピアインストラクション」、看護教育、55(5):398-404, 2014

大島・福島・山岡「座談会『再考:アクティブ・ラーニング』」、医学教育、48(4):205-220, 2017

小嶋雅代「意見:座談会『再考:アクティブ・ラーニング』を読んで」、医学教育、48(5):304, 2017

「アクティブラーニング　大学の教授法3」、中井・編著、玉川大学出版部、2015

「ディープ・アクティブラーニング」、松下・編、勁草書房、2015

「失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング　アクティブラーニングシリーズ7」、亀倉正彦・著(溝上・監修)、東信堂、2016

「大学教員のための授業方法とデザイン」、佐藤・編著、玉川大学出版部、2010